

Eds. Christopher Ricks and Jim McCue:
The Poems of T. S. Eliot, Volume I Collected and Uncollected Poems, xxv + 1311 pp.,
Volume II Practical Cats and Further Verses, xix + 667 pp.
 London: Faber and Faber, 2015

山口 均

「ゲロンチオン」(“Gerontion”)はT. S. Eliot(1888-1965)の作品の流れの中で、自己の回りをどこか醒めた目で「観察」した『プルーフロックとその他の観察』(1917)から、晦渋な韜晦とともに四行詩という定型の中に「私」を封じ込めた『1920年詩集』(1920)を経て『荒地』(1922)へと至る道筋の、いわば「初期の終焉」のような場所に位置づけられると思う。この詩が何を語っているのか、混乱したヨーロッパ世界を一人の瘋癲老人の姿に投影している、というようなお決まりの解釈もあるが、実はあまりよく分かっていない。次のような一節がある。

In depraved May, dogwood and chestnut, flowering judas,
 To be eaten, to be divided, to be drunk
 Among whispers; by Mr. Silvero
 With caressing hands, at Limoges
 Who walked all night in the next room;

By Hakagawa, bowing among the Titians;
 By Madame de Tornquist, in the dark room
 Shifting the candles; Fräulein von Kulp
 Who turned in the hall, one hand on the door. (ll. 21-29)

詳細に解説する余裕はないが、一般的には、一群の退嬰的な雰囲気に入った人々の姿を描いていると解釈されている。ひとまずは、そこには踏みこまない

ことにするとして、この引用のうち、25行目と26行目の間の空白行に問題がある。エリオットの詩集にはいろいろな版があるが、英国版ならFaber社の *Collected Poems 1909-1962*、米国版ならHarcourt Brace社のものが代表的で信頼の置けるものだと思われる。Harcourt Brace社からは *The Complete Poems and Plays 1909-1950* という版も出ているが、実はこちらの版では上記の引用のような空白行を入れていて、それに従っている版も他に少なからず見かける。普通に考えるとこの9行は内容的に連続していると読めるので、この空白行は不自然な気もする。それでは、FaberやHarcourt Braceの *Collected Poems* ではどうなっているかと言うと、どちらも25行目と26行目が偶然頁変わりにあたっていて、にわかには判断できないのである。当然連続して捉えていたものが、*The Complete Poems and Plays 1909-1950* を見て、一瞬戸惑うことになる。

前置きが長くなったが、このたび出版された二冊本の *The Poems of T. S. Eliot* はいろいろな意味で「途轍もない労作」と呼ぶべきものである。エリオットに限ったことではないが、これだけの詩人であってもこれまでその作品の全貌をそれなりに容易な形で読むことができなかった。日本で、例えば萩原朔太郎(1986-1942)について言えば、補巻一冊を加えた筑摩書房版の16冊の全集を手に取りれば、かなり完全な形で詩人の生涯の作品を読むことができるが、エリオットの場合にはそれが相当難しい作業だったのである。

この二冊本の特徴は三点ある。(1) これまで初出箇所のコピーなど、特別な形でしか読むことのできなかった作品が統一的に読めることになったこと、(2) 極めて詳細、かつ膨大な「Commentary」が付けられていること、そして(3) 本文校訂が時系列を辿って正確になされていること、である。

(1) について言えば、編者の一人Ricksが1996年にエリオットの初期習作詩をまとめた *Inventions of the March Hare: Poems 1909-1917* は『荒地』以前のエリオットを考える時に欠かすことができない一冊で、その後のエリオット研究に及ぼした影響ははかりしれないが、今回のものにはそれをはるかに上回る作品群が掲載されていて、Volume Iには“Uncollected Poems”として合計80編が載っている。Volume II掲載の後期の作品のうち *Noctes Binanianae* はもともと私家版で

あった事情もあり、これまで正式な研究の対象にされてこなかったものであるし、“Improper Rhymes”（「猥雑詩編」）も初出にあたるしかなかったものが網羅的に掲載されていて、ごく普通に読むことができるようになった。

(2) の annotation については、取りあえずは圧倒される他はない。Vol. I について言えば、本文理解の基礎となる直接的な主要な典拠を始めとして、約 1000 頁が充てられている。面白いのが、エリオットの作品朗読時の発音がしばしば参照されていることである。書かれたもの、としてだけではなく、「声」として、今一度彼の作品に接してみたいと思わせてくれる。“Gerontion” について言えば、これが一部で言われるような [dʒe] ではなく（深瀬基寛が日本語に移したように）[ge] と強くギリシア語的に強く発音されていることが分かる。

初期の作品“Portrait of a Lady”の当該箇所を見てみると、初出の詳細な事情から始まり、例えばそのタイトル自体がこれまで考えられていたように単に Henry James の *The Portrait of a Lady* に触発されただけではなく、ボストンの個人美術館 Isabella Stuart Gardner Museum の所蔵品など、いわば複合的な背景が指摘されている。評者は、以前この作品をエクフラシスの視点から考えようとした時、ある特定の絵画が背後にあるのではと目星を付けて絵画作品を渉猟してみたことがあったが、エリオットの場合は単一の起源に遡るのではなくて、もっと大きな背景が仮想的に集約されたものだと考えた方がよいことに気付かされた。

衝撃を受けた注もある。*The Hollow Men* (1925) の最後に置かれた、“*This is the way the world ends/ Not with a bang but a whimper*” が、その後、日本への原爆投下に結び付けられて語られること（世界の終りは“*not with a whimper but a bang*”ではないか、という反論）へのエリオットの反応である。エリオットは、この詩が核兵器と結び付けられて、あまりに暗く解釈・引用されることに違和と負担を覚えて、その後はあまりこの詩に触れることを好まなかったという事実の指摘である。

あまりにも膨大な注釈の全体像を述べる余裕はないので、評者がたまたま関心のあるところに触れたが、エリオットの詩作品は、ごく細かい表現にこだわると、全体にかかわる手掛かりがつかめること多いので、本書の annotation はそのほぼ完璧な「出発点」を示してくれる。

さて、最後の(3)である。実は、本稿の最初で述べたように、エリオットの詩句については結構解決されていない校異が多い。それが本書では、350頁に及ぶVol. IIのTextual Historyを通じて「定本」が示され、作品の生成過程が微細な箇所まで丁寧にすべての作品について提示されている。

このように、本書はエリオット研究にとって途方もない出発点を提示してくれている。これだけの詳細さを持ったものを、この二人の編集者が行ったことはほとんど信じがたい、というのが本書を前にしての取りあえずの感想だった。

本稿の最初に挙げた「ゲロンチョン」の引用箇所に戻ると、本書によってこの空白行についても事情がよく分かる。やはり25行と26行とには空白行を置かないのが自然だろう。評者もずっとそう読んできた。

ところが、それはそれで問題が残るのである。「リモージュ」は普通フランスの都市名と考えられていて、ここでシルペロ氏はリモージュに滞在していて、そこで何かを「隣の部屋で」撫でまわしていることになっている。しかし、そうすると、次に登場するハカガワ、ド・トルンキスト夫人、フォン・クルプ嬢との位置関係が突然曖昧になる。これまでの解釈は、そこには目をつむっている。ここに空白行を置いた版が、それなりに受け入れられてきたのは、実はこの部分の不自然さを回避するためではなかっただろうか。

26行目の「ハカガワ (“Hakagawa”）」は、例えば、「腰をかがめて絵につけられた小さなプレートを見ている日本人のイメージ」(岩崎宗治訳『荒地』、岩波書店、2010)などと、「墮落した (“depraved”）」という言葉を引きずったまま解釈されてきたが、最近エリオット研究とは離れた箇所で(Christopher Benfey, *The Great Wave: Gilded Age Misfits, Japanese Eccentrics, and the Opening of Old Japan*, 2003)、これが「Okakura」のもじりであると指摘されていることを知って、これも衝撃を受けた。「岡倉天心」である。エリオットと天心がボストンで交友関係にあったことは書簡集*The Letters of T. S. Eliot Volume I 1898-1922* (Faber, 1988)の中の微細な記述から判明しているが、二人の交友はもう少し深くて親しいものだったのではないだろうか。そうすると、最初に引用した部分は、退嬰的というよりは高踏的な芸術愛好家の一群を、やや距離を置きながら描いていると読めてくる(“I have no ghosts”)。先の「リモージュ」を都市名ではなく、

「リモージュ陶器」と捉えれば、この四人は、とある美術館を共に訪れているのではないだろうか。それなら、空白行は必要なくなる。

今回の *The Poems of T. S. Eliot* で私たちに示されたものは、それがいかに完璧であろうとも、やはり、あくまでも「出発点」である。次の階梯、つまり読みの深みに至るには、本書を共通の出発点として、大胆で新しい解釈の可能性に挑むことであろう。とまれ、私たちには、かくも強固な土台が提供されたのである。今後のエリオット研究の一層の深化が期待される。